

グリム童話「六人男世界を股にかける」(KHM71)と「六人の家来」(KHM134)を読む

金成陽一

要旨

二つのグリム童話「六人男世界を股にかける」と「六人の家来」を取り上げた。どちらも特別な才能を持った人間が集まって力の強い者に対抗していく物語である。彼らの相手が悪人であればあるほど、最後に待っている愉快的なハッピーエンドが強調されて耳に心地良い。いくつかの競争に関するエピソードや、火や水の象徴性について論じた。「六人の家来」にはギリシャ神話やゲルマン神話からの影響が大きい。登場人物たちの能力があまりにも現実離れしているが故に、これらの物語は人々に単なる夢物語として素直に受け入れられたのだろう。既にしっかりとしたヒエラルキーが確立していた中世社会で、ただの一兵卒がお姫様と結婚するなど現実には全くありえないことであった。

Eine Interpretation über Grimms Märchen “Sechse kommen durch die ganze Welt” (KHM71) und “Die sechs Diener” (KHM134)

In diesem Märchen haben die sechs Schurken die Welt des Feudalismus aufgeführt. Da ihre Taten und Fähigkeiten zu überbermenschlich sind, wurde das Märchen von vielen Leuten aufgenommen.

In Wirklichkeit war es für einen armen Mann unmöglich, einer Prinzessin einen Antrag zu machen.

「六人男世界を股にかける」

I 出合い

「六人男世界を股にかける」(Sechse kommen durch die ganze Welt:KHM71)は痛快なストーリーで子供たちを魅了する。

主人公の男は、戦争中とても勇敢な兵士だったのに、戦争が終わると銅貨三枚を貰ったきりでさっさと解雇され、「王さまに国じゅうのたからものを出さしてみせるぞ」と誓う。

同じグリム童話の「青いあかり」(KHM116)でも、一人の兵士が終戦と同時に、王様に「故郷へかえるがよい。もう、おまえは用なしだ。金は、もうもらえんぞ。給料をもらうのは、わしにそれだけの奉公をするものに限るのだからな」と、はっきり宣告されていた。兵士はその後、魔女が古井戸の中へ落した不思議な青い

燈火の力によって王様に復讐を果たし、めでたくお姫様を手に入れている。アンデルセンは、13世紀頃からヨーロッパに伝わるこの話が余程気に入ったらしく、「火打箱」(Das Feuerzeug)というタイトルでそっくりそのまま自分の童話集の中に取り入れてしまった。

兵士という職業は戦争中こそ尊重されるものの、平和時には活躍の場もなく、単なる邪魔者と看做されかねない。こうした物語は、そんな兵士たちの状況を如実に反映しているのだろう。(必要な時は大いに重用されても、用がなくなればさっさとお払い箱とは、現代日本の派遣社員やパートタイマーの状況にもよく似ていないか。) 仕事で自分の努力や業績が正当に評価されなければ、理不尽と思うのは当然だし、誰だってそんな状況がずっと続けば仕事に対する熱意も冷めてしまうだろう。この兵士の場合はもっとひどい有様で、有無を言わず王様から一方的に解雇されてしまったのだから、彼がまさに「恩を仇で返された」気分であったのも無理はない。兵士は怒り狂いながら森の中へと入って行ったのである。

「赤ずきん」や「白雪姫」などグリム童話の多くの主人公たちが、森の中で様々な出来事に出会うのは決して偶然ではなく、それらは往々にして主人公自身の無意識の危険な側面を表している場合が多い。森は異界の象徴と考えられ、そこへ入っていくのは、つまり魂が危険な死の領域に入り込んでいくことを表しているのだ。赤ずきんは森の中で狼に呑み込まれ、森の小人たちの家にいた白雪姫も継母の毒リングで死んでしまった。森の中での死は、彼女たちにとって再び生まれ変わっていくためには何としても必要な儀礼だったのである。人間の管理など及ばないことから、理性の外にあるものを表していると考えられるドイツの深い森は、復讐に燃えた男が行くには一番相応しい場所だったのである。

森へ入った兵士はまず初めに、六本の木々をまるで麦藁のように引き抜いている男に会い、「自分の家来(Diener)になって、一緒に行かないか」と誘う。「いいとも」とすぐに承諾する男の単純さには驚かされるけれど、ここで彼が暫らくためらったり、あれこれ思い悩んだりしたなら、それはもうメルヘンというよりむしろ小説の分野となって、特に子供には複雑で分かりにくくなってしまう。重要なのは話のエキシなことから、ストーリーが単純であるに越したことはないのである。森で男が引き抜いていた六本の木は、兵士がこれから出会う五人のメンバーと自分を入れた数に符合している。また、男がそれらの木の一本を「あとの五本のまわりにぐるぐる巻きつけ」たのは、兵士がリーダーとして五人をまとめしていく暗示となっており、この物語はなかなか巧妙に仕上げられているのだ。

さて、話がまとまった二人がちょっと歩いて行くと、一人の狩人が鉄砲で二マイル先の柏の木にとまっている蠅の左目を撃とうとしていた。兵士は狩人のその説明を聞いただけで信用し、自分の家来になって一緒に行かないかと誘う。兵士は力持ちの男に出会った時には、彼の行動を目の当たりにしてその実力のほどが

よくわかっていたのに、狩人には一度も実演を求めてはいない。この後、兵士が
出会う他の三人も、実際のパワーを目撃してびっくりしたのは鼻息で風車を回す
男だけで、後の二人はやはり彼らの話だけを聞いて仲間には誘っている。あらゆる
技 (allerlei Künste) に通じていた兵士は、ひょっとすると出会っただけでも男
たちの実力がわかったのかもしれないし、あるいはここではただ偏に人を信用す
る大切さを強調しているだけなのかもしれない。

狩人が狙う蠅がとまっていた柏は特にドイツ人に好まれる木で、例えばロマン
派の愛国詩人アイヒェンドルフは詩集「自由の嘆き」の中で柏の木のある故郷を
美しく詩っている。⁽¹⁾

ドイツでは、貫禄のあるさまを「柏の木のようにどっしりしている」(wie eine
Eiche fest stehen)と言うし、また「柏の木は一撃では倒れない」(Keine Eiche fällt
auf einen Streich.)といえは「根気が成功のカギ」ということで、斯様にドイツ人
の柏の木への思い入れは強い。また、柏はゲルマン神話の雷神トールの木として
神聖視され、毅然とした揺ぎ無さや強さ、そして自由の象徴となっており、その
葉は勝利の表象ともなっている。

そんな柏の木にとまっていた蠅は、キリスト教では悪と疫病の運び屋である悪
魔であり、贖うべき罪を表している。いくら追っても追っても食物や汚物に集ま
ってくる蠅は、その習性からどの国でも悪の権化と看做され、悪霊もしばしば蠅
の姿で表わされた。自分が撃とうとしているのは「蠅の左目」と言う狩人を、兵
士が仲間には誘ったのは、その狩人がとても知的でユーモアに溢れているのを見
抜いたからだろう。

「知患者の心は右にある」との聖書の伝承から「右」(right)は「正しい」と連
想されるのに対して、「左」(left)の意味するところは「弱い」(weak)「無価値」で
あり、民間伝承でも左側は不吉や異常性を表し、邪霊の支配するところとされて
いる。狩人はつまり、ゲルマン時代に神聖視されていた柏の木にたかっていた悪
の運び屋である蠅を取り除こうとしていたのだ。

三人が歩いて行くと、今度は風もないのにぐるぐる回っている七つの風車を見
つける。七は幸運なもの結びつくと更なる幸運をもたらすものになるというから
、これら七つの風車は彼らの幸せな未来をそれとなく知らせていたのかもしれ
ない。風車から連想されるのは収穫である。愉快なことにこの風車を回していた
のは、木に腰かけた一人の男の鼻息であった。「鼻息が荒い」とは意気込みが激し
い強気の意である。

「神が鼻息によって敵を滅ぼす」と書かれているのは旧約聖書「出エジプト
記」⁽²⁾であった。

童話に登場するこの三番目の男は、まさしく神と同じように後になって鼻息で
王の家来たちをことごとく吹き飛ばしてしまう。

この後、四人と出合って仲間になったのは、あまりに走るのが速過ぎるので足

を一本はずしているという奇妙な男と、片方の耳に小さな帽子を被せている気障な男の二人であった。「自分が帽子をまっすぐに被ると、飛んでる鳥ですら凍え死んで地面に落ちてしまうほど寒くなるのだ」と男は兵士に説明していた。その前に兵士が「道化(Hans narr)じゃあるまいし、帽子で耳を隠すのはよせ」とやんわり言っていたのは、自分に敬意を示すようにとの遠回しの諫言だったのだろうが、男の説明を聞くと彼はすぐに納得する。道化とは、とにかく人に嘲笑と恐れのおもむきを呼び起させ、社会の常識には決して同調しない存在なのである。

II 競争あれこれ

くびになった兵士が、森の中でそれぞれに個性的な五人の男たちに会おう前半部は、次の「さて」(Nun)という言葉からいよいよ核心に入っていくことになる。ある町で王様が「自分の娘と競争して勝った者を彼女の婿にしてやる。しかし、負けたなら首を差し出せ」と公告していたのだ。

この王様は、兵士を解雇した王様とは別人らしいけれど、兵士が復讐してやろうとしていたのは特定の王様というよりは、むしろ彼に代表される国家権力に対してだったのだろう。兵士は、お姫様との競争に家来を出場させても良いという王様の約束を取り付けたのだが、しかし負けた場合は家来と自分の首を差し出さなければならない。彼は命を賭けてでも王という絶対権力者の鼻を明かしてやりたいと思っていたのだ。

この「走る男」とお姫様との駆け較べは、イソップ寓話「兎と亀」を連想させる。遠くの泉から水甕に水をいっぱいにして先に戻った方が勝ちと決められた競争で、速過ぎて油断した男は帰り道で眠ってしまったのである。その間に通り過ぎたお姫様は男の水甕の水をこぼして先に行ってしまったのだから、幼い子にだって彼女の性格の悪さはよく理解できようというものだ。人が見ていなくとも誠実に振舞えるのが本当の紳士淑女のはずだけれど、如何せんこのお姫様はそんな道徳律など微塵も持ち合わせてはいなかったらしい。

走る男は面白いことに、仮眠の際にもすぐ目が覚めるように「地面におちていた馬の頭蓋骨」を枕にしていたのだという。彼の行為は昔ザクセン人たちが、「馬の頭蓋骨は災いをさけて福を呼ぶ」と信じていたことに関連しているかもしれない。今でもこの地方を旅すると、時々農家の家の軒下に馬の頭の像が飾られているのを見かけることがある。走る男は目の良い狩人が鉄砲で馬の頭蓋骨を撃ち飛ばしてくれたおかげで目を覚ますとすぐに、気落ちもせずもう一度泉へ行って水を汲み直し、それでもお姫様より早く戻ってきたのであった。

危機に陥っても決してあきらめず、目的に向かって突き進んでいく男の行動力は立派なものだ。こうしたハラハラドキドキさせる緊張感は、子供だけでなく大人をもすぐに物語の中へ誘い込んでいく。普通の人よりずっと走るのが速かったお姫様も、この走る男がどのくらい速く走れるかは想像もできなかったのだろう。

実際、こうした「井の中の蛙」に警えられる人は世の中に結構多いのかもしれないのだが。私が思い出すのは日本書紀に登場する力自慢たきまのの当摩くえはや（当麻）蹶速だ。彼と野見宿禰のみのすくねとの力比べが今日の相撲の起源といわれている。時は垂仁天皇七年の秋七月の己巳つちのとのみの朔乙亥おつひ（七日）のこと。

その日に、倭やまと直のあたひの祖である長尾市を遣わして、野見宿禰を召し出した。こうして野見宿禰が出雲からやって来た。そこで当麻蹶速と野見宿禰とに相撲をとらせた。二人はあい対して立ち、それぞれ足を挙げて蹴とばした。間もなく野見宿禰は、当麻蹶速のあばら骨を蹴とばして折ってしまい、また彼の腰を踏み折って殺した。そこで、当麻蹶速の土地を奪って、ことごとく野見宿禰に賜った。これが、その邑に腰折田があるいわれなのである。野見宿禰は、そのまま留まって朝廷にお仕えした。⁽³⁾

現在、当麻には相撲博物館が残るのみである。

さて、グリム兄弟が集めた「ドイツ伝説集」⁽⁴⁾の206「悪魔の帽子」(Das Teufels Hut)も、間抜けな悪魔がその慢心をキリストによって挫かれた話である。その姿はいかに速くきんとん雲で飛び回ろうとも、所詮は仏の手の内から出ることが出来なかった孫悟空を彷彿とさせる。要するに自信過剰は往々にして身を滅ぼすということである。

童話の「娘と競争して勝てば婿にしてやるが、負ければ殺す」というモチーフは、実は有名な狩人アタランテが彼女に求婚してきた者たちと競争して負かしたギリシャ神話にそっくりなのである。

男の子を欲しがっていたアタランテの父は彼女が生まれるとすぐに捨ててしまったのに、後になって成長した娘に再会すると、後継ぎの男の子を望んでしきりに結婚を勧めたのだった。結婚する気など毛頭なかったアタランテはその時、「自分と競争して勝った男と結婚します。しかし負けた者は、その場で命を失わなくてはなりません」と父に答えていた。彼女は求婚者たちを少し先に走り出させて、後から槍を持って追いかけて刺し殺したというのだから、何とも残酷な話である。しかし、競争に負けて殺されていった男たちがどれほどの恐怖を感じたか、あるいは愛した女の手にかかるのは幸せだったのかはよくわからない。

すでに多くの若者が殺されたのち、アムビダマースの子メラニオンあるいはメガレウスの子ヒッポメネースが彼女に恋し、アプロディーテーより与えられた三個の黄金の林檎をもって競争に臨み、追いつかれそうになると林檎を投げた。アタランテがそれを一個ずつ拾っているあいだに、競争に敗れ、彼の妻となった。(中略)なおエピダウロスの地には《アタランテの泉》があり、

彼女が狩の途中渴を覚えて、槍で岩を撃ったとき湧出したと伝えられる。⁽⁵⁾

「アタランテーの泉」のエピソードも、童話の中でお姫様と走る男が水を持ってこなければならぬ「遠くの泉」(aus einem weit Brunnen)とオーバーラップしている。

それにしても童話の「走る男」が「あまりにも速く走るから脚を一本取り外している」というのは愉快だ。もし脚が一本しかなかったなら、走るどころかまともに歩くことすら出来ないけれど、ランナーの科白はこれだけで子供たちを十分に面白がらせるに違いない。

2008年1月15日付朝日新聞に、「義足ランナー五輪ならず」という見出しで小さな記事が掲載されていた。北京五輪への出場を求めている南アフリカ出身の義足ランナー、オスカー・ピストリウス氏が、国際陸連から出場を認められなかったというニュースである。

しかしその後同年5月17日のいくつかの新聞には「義足ランナー勝訴」の記事が踊っていた。

CASは、国際陸連が、義足が生む有利性を十分に証明していないとして退けた。一方でこの裁定はピストリウスの事例に限定し、ほかの義足選手には適用できないと指摘。ピストリウスの義足も、将来的に国際陸連がより精度の高い科学的根拠を示せば、禁止される可能性も示した。

生まれつきの障害で1歳になる前に両ひざ下を切断。2004年アテネ・パラリンピックの200メートルで優勝。昨年7月には世界のトップ選手が出場した競技会で400メートルのBレースに出場。2位に入った。⁽⁶⁾

ひょっとすると、童話の「走る男」もピストリウス選手と同じように、カーボン繊維製の義足を用いて爆発的な推進力を得ることが出来たのかもしれないなんて考えると愉快である。しかし結論からいえば、ピストリウス選手は残念ながらタイムが伸びずメンバーには選ばれなかった。7月17日の朝日新聞(朝刊)には、「両足義足の男子陸上選手、オスカー・ピストリウスは16日、スイスのルツェルンで行われた一般の競技会の男子400メートルに出場し、自己ベストの46秒25で3位となったが、北京五輪の参加標準記録A(45秒55)、B(45秒95)は突破できず、個人種目での同五輪出場の可能性はなくなった。」との記事が載っていた。

Ⅲ 勝利

兵士たちの側が見事に勝利をおさめたのだから、本来なら物語は主人公がお姫様と結婚してめでたくお終いになるはずなのに、王様も娘も約束を守らず六人全員を殺そうとする。王様がみんなを食事に招いたのは、中世において宴会がかけ

がえのない大切な行事だったからだろう。「食べ物や飲み物は単に身体に栄養をつけるためのモノであるだけでなく、それ自体のなかに生命力をもっているモノと考えられていましたから、同じ食べ物を食べ、同じ飲み物を飲むという行為は、兄弟となる重要な儀式でもあったからです」⁽⁷⁾ という訳だが、しかし王は床も戸も全てが鉄でできた部屋へ六人を案内して、全員を部屋ごと蒸し（焼き）殺そうとしたのだ。

ある土地の権力者が、得体の知れぬ六人の流れ者たちを闇に葬り去ったところで、文句を言う者もいないではないか。実際、13, 4世紀頃のドイツでは、盗賊騎士たちや流浪の傭兵たち、野蛮な巡礼者やジブシーの群れ、そして危険極まりない犯罪常習者たちが数多跳梁跋扈していたのである。犯罪の増加に対処するため、14世紀頃から次第に公開裁判が肯定されてはくるものの、判決は勝手気儘な場合も多く、その刑罰は残酷極まりない方法で実施されていた。

疑心暗鬼と不安に苛まれていた人々にとって、1507年に法律化された秩序だった刑事訴訟手続法の書「バンベルク刑事法典」は、こうした混沌の時代に大きな救いの書であり、以後三百年にわたってドイツ刑事訴訟法の基礎となった。フランケン地方の騎士であったヨハン・フォン・シュヴァルツェンベルク（1465－1528）は、15世紀のバンベルク裁判所での実務に基いて、「司法とは形式張った原則ではなく、国と民にとって有益となるものであるべき」という思想の持主であった。

この「バンベルク刑事法典」に載っている「処刑前の食事」(1507.A.C. : Bilder aus dem Kriminalmuseum: Mittelalterliches Kriminalmuseum, früher Komturei des Johanniterordens. Rotenburg o.d.T.) という図版には、四人の男と三人の女たちが食卓を囲んで最後の食事をとっている光景が描かれている(図1)。テーブル上には魚や鳥（と思われる）やパンなどが並べられ、右端の女はワインかビールを飲んでいる。左側の男は二人の女としんみり話しこんでいる様子だし、一方、中央の男二人はカードを手をしている。タイトルから類推するに、恐らくこの左端の男がこの後処刑されることになっているのだろう。シンプルな絵であっても、彼以外の人たちからはこれから死に行く緊張感は伝わってこない。童話の王様が六人を招き入れた小部屋も、全てが鉄で出来ていた以外は、きっとこの図版のような雰囲気だったのではあるまいか。兄弟となるはずの儀式であった宴会は、実は王のたくらみで六人の「最後の晩餐」になるところであった。



図1

昔、ケルトのドルイド僧たちは森に住んで、巨木となるオーク（柏）の木を神聖視し、特にその樹に生える宿り木を切る時は鉄ではなく金の小刀で切ったという。鉄は「無情な力」、陰険さ、不純、悪魔の力を象徴すると彼らは考えていたからである。確かに、鉄の冷たさや重さから、こうしたイメージが湧いてくるのはよく理解できる。

王は鉄の床下に火を入れて六人を焼き殺そうとしたのだったが、耳に帽子をあてていた男がそれを真直ぐに被り直したため、急激に寒くなって失敗した。何年前か前、記録的猛暑に襲われたヨーロッパでは、（特にそれまで家庭用エアコンなど必要としなかったフランスやドイツで）熱中症で死亡した老人が続出したのは記憶に新しい。

四大元素からなる物質世界のあらゆる対立関係を代表する火（熱）と水（寒さ）は、互いに相争っても生命にとっては必要不可欠なものである。生物は地球上でこの熱と湿気との微妙なバランスの上に存在しているから、どちらかの力が極端に大きくなっても、それこそ絶滅の危機に瀕しかねない。その意味で火と水は、神的にも悪魔的にもなるのである。水は不浄なものを洗い流し、火はあらゆるものを焼き尽くすから、言葉を変えるならそれらは創造的であると同時に、破壊的でもある。

六人の抹殺に失敗した王様は、娘をやる代わりに「欲しいだけの金貨をつかわす」と交換条件を出す。可愛い娘をどこの馬の骨だか分らぬ男にやりたくない父親と、たちの悪いお姫様などとは一緒になりたくもなかった男にとって、この提案はとても合理的だった。（テキストはいつの間にか兵士のことを親方 [Meister] と表現している）。

「私の家来がかつげるだけの金貨を下さい」という兵士の条件を、王様はすぐに承諾する。王様がその時何かしらの制約をつけたとは一切書かれていないけれど、でも物事を契約する際には細心の注意を払うべきで、後になってから内容を変更しようとしても手遅れなのである。「グリム・ドイツ伝説集」に載っている「419ザクセン人たちが牡牛城を築いた話」は、巧みな頓知をきかせた話でとても面白い。

ザクセン人たちがイギリスに着いた時、彼らはそのこの王に、「自分たちに、一頭の牡牛の皮で覆うことの出来るだけの土地を与えて頂けないか」と頼んだのであった。

王がそれを認めると、ザクセン人たちは皮を細い紐状に切って、それで広い場所を囲い、そこに牡牛城という名の城を建てたのである。⁽⁸⁾

「一頭の牡牛の皮で覆うことの出来る土地を分けて欲しい」というザクセン人の表現は実に巧みだった。王はまさか彼らが牛の皮を細い紐状にして土地を囲む

とは夢にも思わなかったに違いない。しかし王たる者は一度した約束は絶対に反古にしてはならないのが中世の掟であったから、まさにこれはザクセン人たちの機智の勝利といえるだろう。

童話の王様も、大切な娘と引き換えに「かつげるだけの金貨」を提供したはずなのに、いざ国中の財産がなくなると騎兵を派遣して六人を殺そうとした。この王様は一度ならず二度までも自らの約束を破っており、最高権力者としての資格など初めからまるで持ち合わせてはいなかったのである。王の命令で六人を追って来た二個連隊は、「鼻息の強い男」にあっていう間にどこかへ吹き飛ばされてしまう。

息と風とが同じイメージであるのは、どちらも目に見えず、普段取り立てて意識することなどないからだろう。しかし息が止まれば人間は死んでしまうし、台風や竜巻のような強風に見舞われれば、人間どころか車や家までもいとも簡単に吹き飛ばされてしまう。

風の威力を見縊っていた追手の兵士たちは、あつという間に吹き男の鼻息で青空へ舞い上がり、山を越えてどこかへ飛んで行ってしまったというのだから、その威力たるや相当なものだったのだろう。1990年に千葉、そして1999年に愛知で観測されたF3クラスという大きな竜巻のエネルギーは、列車が脱線転覆、重い車や家までも吹き飛ばしてしまうほどであったという。男の鼻息はひよっとするとこれに匹敵するほどだったのかもしれない。

二度までも約束を破った王様は、最後にいたしかたなく六人を見逃すことにする。自分の軍隊が全滅してしまった王様など既に何の権威も値打もないし、これ以上六人と争えば今度は自分の命まで落としかねない。皮肉にも、もう何も打つ手がなくなった王が最後に仕方なく「あいつらを放っておけ」と出した結論が、彼の今までの判断の中で一番賢明であったという訳である。

六人のならず者たちが封建秩序の出来上がった社会を、如何に引っかき回したかを面白おかしく述べたこの話は、登場人物の行動、能力があまりにも超人的、突飛だから、全くの夢物語として人々に受け入れられたのではあるまいか。ヒエラルキーがしっかりと確立していたヨーロッパで、そもそも平民がお姫様と結婚できるなんて、現実にはまるであり得なかったのだから。

「六人の家来」

I エピローグ

「六人男世界を股にかける」の姉妹編といえるのが「六人の家来」(Die sechs Diener:KHM134)であろう。

兵士ではなく、れっきとした「どこやらの王子」であるこちらの主人公は、美しいお姫様と結婚したいという願いを父王に、「あすこに行くのは死に行くよう

なもの」と反対されると、七年もの間死ぬほどの大病となってしまったのだった。姫の年老いた母親は魔法を使い、彼女にプロポーズする男がやって来ると難題を出して、出来なければ容赦なく殺していたのである。しかし王子の恋煩いに父王は結局、「胸もはりさける思いで」息子に運試しを許したのであった。

旅に出た王子が最初に会ったのは、横になると山のように見えるお腹をした大男で、「うんと息んばりゃ身体はこの三千倍もでかくなる」と言う彼は、王子に誘われて一緒に行くことにする。

次に王子が出会った素晴らしく耳のいい男は、婆さまの御殿で「おひめさまをお嫁さんにもらいにきた男の首を斬る、ばさっという刀の音が聞こえる」と説明して、やはり王子のお伴になった。三番目はひよろ長い縄のように背の高い男で、「世界中の一番高い山よりおいらのほうがもっと高い」と言って、王子の家来になる。四番目は、目隠しを外すと「何でもかでも破裂」させてしまう男。五番目は、暑い時は寒く、寒い時には暑いと感じる奇妙な男。そして六番目が、世界中見通せる千里眼の男という次第であった。彼ら六人がこれから始まる王子の冒険の周到な布石となっているのは勿論である。王子は彼らを連れて、魔法を使う婆さんと美しいお姫様の住む都へと乗り込んでいったのであった。

「六人男世界を股にかける」とこちらの作品は、一人の男が次々に特技をもつ男たちを家来にしてお姫様を手に入れようと難題に挑む設定は同じでも、主人公の動機はまるで違う。必要な時だけ体よく使われて、不要となるとさっさと解雇された兵士は、悔しさをばねとして、王に復讐するのが目的であったのに対して、王子の動機はあくまでもお姫様への恋慕の情であった。兵士が最後に、お姫様よりも「家来がかつげるだけの金貨」を貰うことにしたのは当然であった。彼にとっては社会的地位とか美しいお姫様などより、むしろ国中の金貨を手に入れて、王に代表される国家権力の鼻を明かしてやる方が重要なのである。自分の目的達成のためには、花嫁などどうでもよかったのであろう。

これに対して、王子の美しいお姫様を手に入れたい気持は純粹である。何しろ彼は父王に結婚を反対されると、死ぬほどの病気になって七年もの間枕が上がらなかったというのだから。それにしても、会ったこともないただ美しいという噂だけの女性に、これほどまでにほせ上るのは若さのなせる業か、あるいは親に反対されたが故に益々恋心が募ってしまったのだろうか。これこそまさに禁じられるとやりたくなるという「禁止の魔法」といっていいであろう。

六人の男たちは王子に誘われるまま、いとも簡単に家来になる。給与がどのくらいで地位がどうかなど、ここではまるで問題にもならない。彼らがそれでいいと思ったならそれが決断の時であり、決してぐずぐず迷ったりはしない。つまり、如何に迷ったところで決断するのは一瞬なのだとこのメルヘンは伝えている。そうでなければ話はなかなか先へ進まないし、第一、子供が退屈してしまうではないか。

II 第一の難題

物語は、旅立った王子が会う六人の男たちそれぞれの特徴（個性）を述べた後、いよいよ彼らが魔法使いの婆さんが出す三つの問題に挑戦する段となる。一番目の問題は、「わたしが紅海の底へおとした指輪をとってくる」というのであった。ここで老婆が言っている「紅海」(das Rote- Meer)とは、アラビア半島とアフリカ大陸の間に実在する海などではなく、恐らく文字通りの「赤い (rot) 海 (Meer)」を指しているのであろう。赤は黒と共に悪魔を表す色であり、民間伝承で魔女やユダヤ人は「赤いパン」を食べると信じられていた。だから赤い海とは、つまり血に飢えた老婆の心を象徴させたものに違いない。私はすぐに、「若い処女の血が美容や回春に効果的である」という古来からの伝承を実践した16世紀ハンガリアの名門貴族であったエルゼベート・バートリを思い出す。⁽⁹⁾

同じように魔法使いの老婆も、美しい姫に寄って来る若い男たちを殺して、楽しみに彼らの血の海に浸っていたのかもしれない。

赤い海の中に彼女が落とした指輪は、ギリシャ神話ではプロメテウスが繋がれていた鎖の連想から束縛や奴隷の身分を表わすのだが、一般的には結婚や豊穡そして権力を表わす。特に旧約聖書で権力の委任は印章付き指輪を通して行われた。魔法使いの老婆は王子に暗に、指輪を持ってくるのに成功したなら権力を移譲しても良いと匂わせていたのかもしれない。また、伝承によればソロモンが知恵を得たのも指輪のおかげであったという。⁽¹⁰⁾

さて、千里眼が赤い海の中に指輪を見つけると、今度は太った男が何と海の水をすっかり飲み干してしまったのであった。

ドイツ語の海を表わす単語にはdas Meer以外にder Ozean (英語 ocean)とdie Seeがある。Ozeanはギリシャ語系の語でWeltmeer (大洋)と訳され、元々はオケアノス (ōkeanós)つまり地球全体を取り巻いている海である。Seeは男性名詞として用いられると「湖」を表し、女性名詞として用いられると「海」を表すゲルマン語系の語で、北ドイツで多く用いられていたのに対して、ラテン系の語であるMeerは本来大陸に囲まれた、あるいは大陸に隔てられた海を意味したのである。老婆の言う「赤い海」は、海というよりはむしろ巨大な湖に近い印象があり、だからこそ太った男が全て飲み乾してしまうという発想も湧いて来たのではあるまいか。いずれにしても、こんなスケールの大きい理屈にもまるで合わない減茶苦茶な話は、子供たちに大いに好まれる。

ゲルマン神話に、英雄トールがウトガルト＝ロキと酒の飲み比べをする話がある。しかしそれは酒といいながら、実は海に繋がっていたのであった。

トールは何ともいわずにもう一度杯に口をつけると、息のつづくかぎり飲み込んだ。しかし杯をおいてみると、最初の時ほどもへっていない。あいかわ

らず酒はなみなみと杯にたたえられている。⁽⁴⁾

勝負に負け、意気消沈して城を去ろうとするトールに、ウトガルト＝ロキは「実はわしはお前を魔法であざむいていた」と打ち明ける。

「お前があの角から飲んだときは、ろくに酒がへらんように見えたろうが。だが、あれを見た時は、じつはおれはびっくり仰天したね。なにしろあの角の先は、お前は知らなかったろうが、海につづいているのだ。それなのに、お前がぐうっと飲むと、みるみる海の水がへったではないか。人間はあれを引き潮というがね。」という訳であった。

どうやらこちらの海は大陸に囲まれたdas Meerではなく、地球全体を取り巻いている海Ozeanだったから、流石のトールも全て飲み乾すことはできなかったのであろう。

Ⅲ 第二の難題

次に老婆の出した難題は、「草原にいる三百頭の牡牛を食べ、地下室にある葡萄酒三百樽を全て飲み乾す」ことであった。

古来、牡牛は典型的な犠牲の獣であり、ギリシャ・ディオニュソス神の儀式にも結びついている。ライオンと同じく遅いとされた牡牛の生命力が、人間の肉体と魂をも甦らせると考えられていたのだろう。「牡牛の死は生を生み出し、この生はさらに新たな生の更新のために再び死に導く」というのが、ペルシャに発し古代のヨーロッパに及んだミトラ教の考えであり、牡牛を屠る儀式をヨーロッパに広めたのもこの宗教であった。

(ミトラの) もっとも栄えある事績は、牡牛を狩り立てて、これを捕らえ、死を下すことである。残された数多くの遺跡から生け贄の儀式の元来の手順を再構成することは不可能ではない。ミトラは角を掴んで牡牛を押さえつける。そして脇腹に膝をあてがって牡牛の頭を後ろにのけ反らせると、深々と短剣を胸に突き立てるのである。この一場は洞窟の中で繰り返されるわけなのであるが、闘いを見下ろす上方に、太陽と月が描かれているところから見ると、この洞窟は天空を象徴したのかもしれない。獣が断末魔の苦しみに身悶えするその間、流れる血は滴って穀物を濡らし、尾からは麦の穂が生え初める。犬と蛇が身を伸ばし、傷口に口を近づけてこの豊穰の血を吸る。さそりが一匹はさみをふるって、牡牛の生殖器官を切り落そうとしている…。(中略)

(「動物シンボル事典」大修館書店)

牡牛を殺してお姫様と結婚するギリシャ神話の英雄といえばテーセウスである。クレタ島のラビリントス(迷宮)に住む牛頭人身の怪物ミノータウロスを退治す

べくギリシャ本土から派遣されたテーセウスに王女アリアドネーは一目惚れした。テーセウスはアリアドネーの助言に従って入口に糸を結びつけ、迷宮の中でミノータウロスを殴り殺した後、糸を辿って無事外に出ることができたのである。しかしその後神話は、テーセウスが眠ったままのアリアドネーを何故かある島に置き去りにしてしまったと伝えている。何があったのか不明だが、テーセウスに捨てられた彼女は最後にはディオニュソス神とめでたく結ばれることになるのだ。この神話にも、牡牛を殺してお姫様と結婚に至るといふ童話のモチーフが潜んでいる。

次に、老婆の言う「牡牛三百頭、ワイン三百樽」という数は、一年の日数から安息日である日曜日を除いた数ではないのだろうか。つまり老婆が彼に、牛を食べワインを飲むにあたって、何時いつまでにと時間の制限をしていないのが重要ではないか。要するに、王子は一年がかりでゆっくり飲み食いしても良かったのである。しかしここでも大男が瞬く間に全て平らげて、物語は大いに時間を節約して進んでいく。

IV 第三の難題

「お前の部屋で娘をしっかりと抱いて、寝てしまわないこと。十二時を打って私が行った時、娘がお前に抱かれていなかったらお前の負け」と、老婆が最後に出した課題は、前の二つに較べてとても簡単な様に思われる。そして王子も「こいつは、わけはない。両目を開きっ放しに置いてやれ」と考えたのだが、しかし簡単そうに見えて、本当に眠れなくなった時、睡魔に打ち勝つのは至難の業であろう。

魂は睡眠中肉体の外にさまよい出るため、魂が戻らないうちに人を眠りから覚ますと死の原因になると考えられていた時期は長かった。前出の「グリム・ドイツ伝説集」248「子ねずみ」はそれを裏付けるような話である。

テューリンゲン地方ザールフェルト近郊のヴィルバッハにある高貴な貴族の領地で起こったことだ。

奉公人たちが小部屋で果物の皮をむいていると、一人の女中が眠くなって他の人たちから離れてゆっくり休むために、それほど遠くないところにあった長椅子に横になった。

女中がしばらく静かに横になっていると、その開いたままの口から一匹の赤い子ねずみが這い出してきた。ほとんどの奉公人たちがそれを見て、お互いにならずき合ったのだ。子ねずみはちょうど開いていた窓の方へ急いでそっと出て行くと、しばらくの間戻ってこなかった。

この出来事がおせっかいな侍女の好奇心をそそり、他の人たちがどんなに止めさせようとしても、侍女は魂の抜けた女中のところへ行って彼女をブルブル

揺り動かし、少し前方の別の場所へ身体を動かした後、再び立ち去ったのである。

その後間もなく子ねずみは再び戻って来て、女中の口から這い出した前と同じ場所へ走って行った。あちこち走って、かつて知ったところに到着することが出来ないと、子ねずみはどこかへ行ってしまった。女中はしかし死んでしまって生き返らなかった。あの好奇心の強い侍女は後悔したが、手遅れだった。(拙訳)

奇妙な話ではあるが、伝えているのは眠っている状態は斯様に危険であるということではないか。

テキストを読むと、魔女がみんなに眠りの魔法をかけたのは11時から12時15分前までの45分間で、これは要するに彼女が何らかの方法で一定時間効き目のある全身麻酔を施したということだろう。この部分、英雄イアソンがアルゴ船で金羊毛を求める旅に出たギリシャ神話を思い起こさせる。彼は魔女メディアと結婚の約束をして味方に引き入れ、「火にも焼けず、刀で切られても傷つかない魔法の薬」を貰って、まずは二頭の猛牛を退治したのだ。次にメディアは、イアソンとオルフェウスを金羊毛がかかっている木のところへと案内した。しかしその木の幹には「見たこともないほど巨大な龍」がからみついていたので、眠りの魔法をかけたのである。

このアルゴナウテスのギリシャ神話は、白い海（エーゲ海）と黒い海（黒海）が舞台となっている点や、牛を退治すること、そして眠りの魔法など、ことごとくグリム童話「六人のけらい」(KHM134)に大きな影響を与えているのではあるまいか。童話で、王子とお姫様を守るべくその周りにとぐるを巻く長身の男も、神話で木にからみついている龍の姿を彷彿とさせるし、更に魔法使いの婆さんの難題の一つは赤い海の中の指輪を持つてくることであった。

魔女の婆さんのかけた「眠りの魔法」は、まるで「野ばら姫」の呪いの如く全ての人たちを眠らせてしまったのに、ただお姫様だけは例外だったらしく、彼女はみなが寝込んだ隙にさっさと逃げ出してしまう。この段階で相手を恋しいと思っているのは王子の方だけで、お姫様は母親の指図で仕方なく好きでもない男に従っているだけなのである。王子は彼女を抱きしめると、その周りを背高のつばに蛇のようにとぐるを巻かせ、太った男には部屋の戸口を守らせていたというのに、それすら何の役にも立たなかった。つまりは如何に無理強いしたところで、人の心を自分の所に留めておくことなどは決してできないということだ。きっとこれが「乙女は一言もしゃべらなかつた」理由であろう。要するに、彼女の美しさに夢中になって「穴のあくほど見てうれしさとかわいさで胸がいっぱいで、目はちっともつかれなかつた」のは王子だけだったのである。だから、お姫様が三つの難題に取り組んだ王子を見捨ててさっさと三百時間もかかる遠い処へ逃げて

しまったのは、母親の意向などではなく彼女自身の意志だったのである。

V（お姫様の難題）と数字

最後にお姫様が王子に出す難題は、「材木の真ん中に座って火をかけられても平気な者が出てこないうちは結婚しない」という奇妙なものである。

火は邪悪な魔力を滅殺するために用いられ、中世の魔女が全て火あぶりにされたのも、魔女たちに汚染された大気を清めるためであったし、それよりもまず燃やしてしまえば魔女たちが復活することはないと考えたからであろう。「火をかけられても平気な者がいなければ、私はあなたの妻にならない」と平然と言い放つお姫様は誠に残酷な女である。

破壊的な猛烈な火の力で、彼女は自分に思いを寄せる男を亡き者にしようとする目論む。恋しい男なら兎も角、そうでもないのに一方的にストーカーされ、しかも結婚までしなければならぬなんて、彼女にとってはとんでもないことに違いない。ならば、ひと思いに全てを燃やし尽くしてしまったなら、さっぱりするではないか。「世界シンボル辞典」（三省堂）には次のように書かれている。

火を起こすことは、誕生や復活と同じことだとみなされ、未開社会では性の交わりによる創造と同じだと考えられている。結婚式や豊穡儀礼で人がもつたいまつは、火の生成力の象徴である。火と水が対になると、宇宙の二大原理としての能動原理と受動原理をあらわす。また火と水は、〈天空・大父〉と〈大地・太母〉であり、四大元素から成る物質界のあらゆる対立をあらわす。火と水は対立・葛藤の関係にあるが、熱と湿気としては生命体に不可欠のものである。⁽¹²⁾

王女の目論見は「暑いほど寒く、寒いほど熱く感じる」男によって失敗し、流石に彼女も結婚の覚悟を決めることになる。あるいは、火によって彼女自身も一緒に清められたということなのかもしれない。

ところで、作品全体を通して気づくのは三の数字の多用である。王子が病に伏している期間だけが七年になっていて、他は例えば「太った男」の身体は伸びをすれば三千倍も太くなるし、「背の高い男」もぐっと手足を伸ばせばやはり三千倍も長くなるのだった。また、魔女の婆さんが出す問題は三つだし、二番目の問題に出る牡牛は三百頭、ワインも三百樽、最後にお姫様が逃げて行った場所までは歩いて三百時間、そして火をつけた材木は三百マルテル（木材を計る昔の単位）、それが燃え続けたのが三日間という次第である。

一と二の結合から生まれる三は複数一般を表していることを考えると、ここで三百という数も、つまりは不特定多数の象徴として用いられているのだろう。

「世界シンボル事典」(大修館書店)には次のように書かれている。「大半の宗教では、神格を少なくともある段階やある形相の下で〈父〉、〈母〉、〈子〉のそれぞれの役割に具象化される三位一体として考えている。カトリシズムのようなもっとも唯心的な宗教でも、〈三位一体〉説を主張し、何よりも絶対的な一神教の中に、現実の生きた関係の神秘的な原理を導入する」。

物語は三という数字に非常にこだわっているのに、母と娘の強力な結びつきのみが伝えられ、気がつけば父である王様は一度も登場してこないのである。ひょっとすると王様は既に死んでいて、母親は「父・母・子」の三位一体を復活すべく、全て三に関係する課題を出したのかもしれない。三は始めと中間と終わり、つまり完成、成就を表す数でもある。

老婆とお姫様は王子が難題を全部片付けたにもかかわらず、それでもまだ兵隊たちや騎兵たちを送って最後の抵抗を試みる。しかし彼らが全滅したところで、二人はやっとあきらめ、王子は目出度くお姫様と「教会堂で結婚の式をすま」せたのであった。

VI 奇妙な結末

その後六人の家来たちが王子の元を去っていったところでハッピーエンドのはずなのに、不思議なことに物語はさらに続いて行く。

王子がお姫様に向かって「自分は王子などではなく、本当は豚飼いである」と嘘をついたのだ。彼の言葉を信じた彼女は、自分が慢心していたからこんなことになったと思う。お姫様が反省するこの点にこそ王子の狙いがあったことが最後には我々にも伝わり、物語は今度こそ本当の幸せな結末を迎える。

豚飼いは不浄を意味し、特に回教徒がこれを食べるのをタブーとしているのはよく知られている。豚が象徴するのは利己主義、忘恩そして更に「高いものから低いものへの墮落」と少しもいい所がない。こんなどん底の状態に陥ったお姫様にとっては、もう人生が終わってしまったような気持だったろう。それだけに自分の夫が豚飼いなどではなく、やはり一国の王子であったと知った彼女の幸福感は一段と大きかったはずだ。勿論こうしたことも王子の計算の一つだったのに違いない。

同じグリム童話「つぐみのひげの王様」(König Drosselbart : KHM52)も同様に、高慢であった王女様が悪食に変装した王子様と結婚させられて、次第にその慢心を改め、最後には幸せになる物語である。

しかしそれにしても、我儘で高慢な女の鼻を明かすためには、こうしたショック療法を肯定している当時の男社会が垣間見えると思うのはきっと私だけではないだろう。女は従順に男に従うべきで、それが一番の幸せなのだという当時の道徳律がひしひしと伝わってくるのである。

註

- 1) アイヒェンドルフ詩集「愛の四季」石丸静雄訳。弥生書房。1976年。

あそこには巨大な森があった
まめやかに幹は枝をからみあわせて
おれに高い緑のドームをつくってくれた

あわれ 美しいかしわの国土よ！
死人のように青ざめて争う者たちが
戦いの斧を手に忍び歩くのが見える

こうして未来の荒れはてた日々にも
たださまざまの悲しい語りつたえが
ドイツの森をしのばせることだろう

- 2) あなたの鼻の息によって水は積みかさなり、
流れは堤となって立ち、
大水は海のものなかに凝り固まった。
敵は言った、『わたしは追い行き、追いついて、
分捕物を分かち取ろう、
わたしの欲望を彼らによって満たそう、
つるぎを抜こう、わたしの手は彼らを滅ぼそう』
あなたが息を吹かれると、海は彼らをおおい、
彼らは鉛のように、大水の中に沈んだ。(第15章8-10節)

- 3) 「日本書紀」井上光貞編集。中央公論社。昭和58年。
4) Brüder Grimm : Deutsche Sagen : Winkler Verlag, München. 1956.
5) 高津春繁「ギリシャ・ローマ神話辞典」岩波書店。1960年。
6) 東京新聞。2008年5月17日朝刊。
7) 阿部謹也「中世の窓から」朝日新聞社。1981年。
8) (4) と同書。拙訳。
9) 洪澤龍彦「世界悪女物語」河出文庫。昭和61年。
「伝説によると、伯爵夫人は、かつて六十人以上の美しい侍女を集めて宴会をひらき、宴果てるや、部屋のドアを閉ざし、泣きわめく侍女たちを次々に裸にして惨殺したという。そして、彼女らの血を桶に集め、みずからも毛皮やビロードの衣装を脱いで、素裸になると、そのまばゆいばかりの白い裸身を血の桶に浸して喜んだという」
10) ジャン・シュバリエ、他「世界シンボル大事典」金光仁三郎、他訳。大修館書店。1996年。
11) 山室静「ギリシャ神話」社会思想社。昭和48年。
12) J・C・クーパー「世界シンボル辞典」岩崎宗治、他訳。三省堂。1992年。

Text

Brüder Grimm : Kinder- und Hausmärchen gesammelte durch die Brüder Grimm.
Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Winkler Verlag. München. 1949.